



## 【会員寄稿】 「先生が一番楽しんでましたね！」 第2学年主任 中川 和彦

5月中旬に2年生は修学旅行に行ってきました。事後アンケートで、修学旅行全般について「大変満足」「ほぼ満足」と答えた生徒の割合を合わせると、東京班が95.7%、北海道班が100%になり、概ね充実した修学旅行であったと言えます。中でも、東京班では「ライオンキング（劇団四季）の観劇」、北海道班では「ラフティング体験」が最も高い満足度を示していました。アンケートの自由記述や修学旅行レポートからも、普段は出来ない経験から、各々が何かを感じ取ってくれたことがうかがえます。表題の言葉は、初のラフティング体験後に、インストラクターや同僚、生徒（複数）から言われたものです。授業以外で、生徒と一緒に何かをする機会が年々少なくなっている私にとっては、恥ずかしくもあり、何だか嬉しい言葉でもありました。

環境が人に影響を与え、経験が人を成長させることは、大人の多くが認めることだと思います。教員として、また一人の親として、子どもと関わる上で大切にしていることの一つは、「好ましい経験が出来るように、環境を整える」ことです。少々のミスは許してもらえる成長過程では、失敗は多くのことを教えてくれる貴重な経験です。本年度、学校生活の中心となる教室環境の整備と災害時の避難の観点から、大きなバッグ類を机間の床上に置かないように同学年の先生方に指導をお願いしています。この他にも、何かが変わるきっかけになればとの思い、九大オープンキャンパスツアーを初め、新たな取組を種々試みているところです。



話は変わりますが、私は10年程前に社会体験研修として、あるテレビ局で6か月間働く機会を得ました。カメラ操作や映像編集、現場での取材やニュース原稿の作成方法を教わり、異なる環境で非常に刺激的な日々を送りました。学校をしばらくの間離れ、違う職種の方々とお互いの仕事の話をする中で、次のような言葉をよく口にしていました。「生徒に対して『あれが出来ていない』『これが出せていない』と小言を言うことが多く、毎日のように嫌な気持ちになる。だけど、教師をしていると年に何回か感動で涙を流すことがあり、この体験は何ものにも代え難い。」

大洲高校で2年目を迎えましたが、まだ今のところ感動の涙を流していません。2年生は大きな学校行事を終え、高校生活の折り返し地点が近づいてきています。日常生活の中での経験は、同じことの繰り返しで、決して刺激的なものではありません。しかし、実感できないほどの小さな変化や歩みの積み重ねが、最後に、揺るぎのない大きなものを生み出すことを経験から知っています。振り返って見ると、感動は常に苦労や困難と一緒にあったように思います。共に先を見据えて、一歩ずつ前に進んでいけることを願っています。

